

(6) 大室古墳群にみる歴史的風致

ア はじめに

大室古墳群は、松代町大室を中心に分布する5世紀前半から8世紀にかけて築造された約500基もの古墳がある東日本最大級の大規模古墳群である。

大室の古墳を記した史料は、松代城下と周辺の地理や社寺縁起等を記した『つちくれ鑑』（落合保考(18世紀前半))が最古といわれる。また、慶応年間に寸竜によって著された『松栄風土記』に「大室塚穴(百余ヶ所)」と記されており、多くの古墳があることが紹介されている。

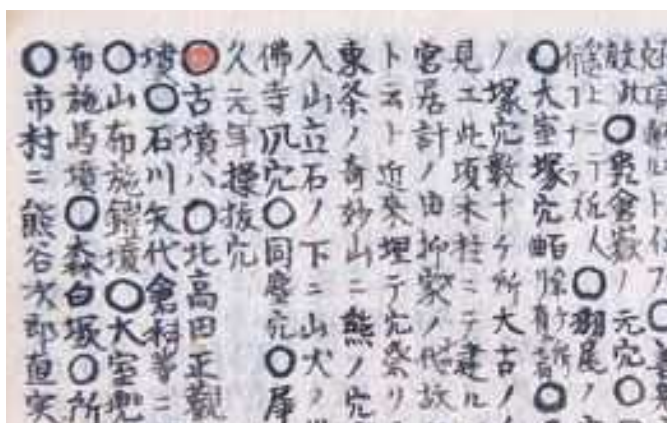
松代町大室では住民が主体となって古墳の調査や保存活動が長く行われてきており、大室史蹟保存会が昭和4年(1929)に建てた「史蹟名勝大室古墳ノ聚落入口」と記されている石碑が集落内に残っている。多くの住民が石碑のあることを知っており、また、石碑が欠損なく残り、そこに刻まれた文字からも歴史資産を守り、伝えてきた住民の誇りや自信をうかがいすることができる。

イ 記念物

(ア) 大室古墳群(史跡)

古墳は、千曲川の南側の山塊からのびる3つの尾根と、それらに挟まれた2つの谷の標高350メートルから700メートルまでの約2.5キ

メートル四方の範囲に分布し、東から北山、大室谷、霞城、北谷、金井山の5つの支群で構成される。古墳の分布は、尾根部にある北山、霞城、金井山支群の約50基に



『松栄風土記』(慶応年間)
下は、大室古墳群の記載箇所



大室史蹟保存会が
昭和4年(1929)に建てた石碑

対し、9割近い約450基が谷部の^{おおむらだに}大室谷と^{きただに}北谷支群にあり、谷部が選地される特性が見られる。

大室古墳群は、長年の調査に基づく特色や学術的意義が認められ、^{きたやま}北山、^{おおむらだに}大室谷、^{かじょう}霞城、^{きただに}北谷、^{かない}金井山、^{やま}の5つの支群のうち最大規模の^{おおむらだに}大室谷支群が、平成9年(1997)7月28日に史跡に指定されている。

a 特徴

本古墳群には、大規模に加えて2つの特徴がある。

1つ目は、石を積み上げて墳丘とした^{つみいしづか}積石塚の古墳が、全体の7割から8割を占めていることである。国内で極めて稀である^{つみいしづか}積石塚が、これだけ多く密集する古墳群は他に例がない。

2つ目は、古墳時代中期前半代(5世紀前半)に^{がっしょうがたせきしつ}合掌形石室と呼ばれる特異な構造の埋葬施設を構築した古墳があることである。箱形石棺様の下部構造に板状の石を三角形の切妻屋根型に組み合わせて天井とした^{がっしょうがたせきしつ}合掌形石室は、全国で40例ほどあるうち25基が大室古墳群にある。さらに、大室古墳群では^{がっしょうがたせきしつ}合掌形石室が必ず^{つみいしづか}積石塚に構築されており、両者の密接な関連がうかがえる点は、他の古墳群に見られない特性である。

b 出土遺物

出土遺物は、^{ほしき}土師器、^{すえき}須恵器の土器類、埴輪、^{びょうどめたんこう}鏡(珠文鏡)、^{けいこう}鉞留短甲や挂甲等の武具類、直刀や鉄鏃等の武器類、^{とうす}馬具類、刀子等の工具類、玉類、馬骨等があり、中でも馬具類が多い。

馬具、馬骨、馬形土製品等の馬に関連する出土遺物の多さは、本古墳群の被葬者が古代の馬匹生産と関わりがあることを示唆し、平安時代の『延喜式』の信濃十六牧のひとつ大室牧の前身との関連が指摘されている。

また、^{つみいしづか}積石塚と^{がっしょうがたせきしつ}合掌形石室の系譜については、朝鮮半島の墓制と関連させる学説もあり、馬匹生産との関連からも渡来系集団が深く関わりを持っていた可能性が想定されている。



大室古墳群遠景



馬形土製品

ウ 活動

(ア) 住民主体の活動

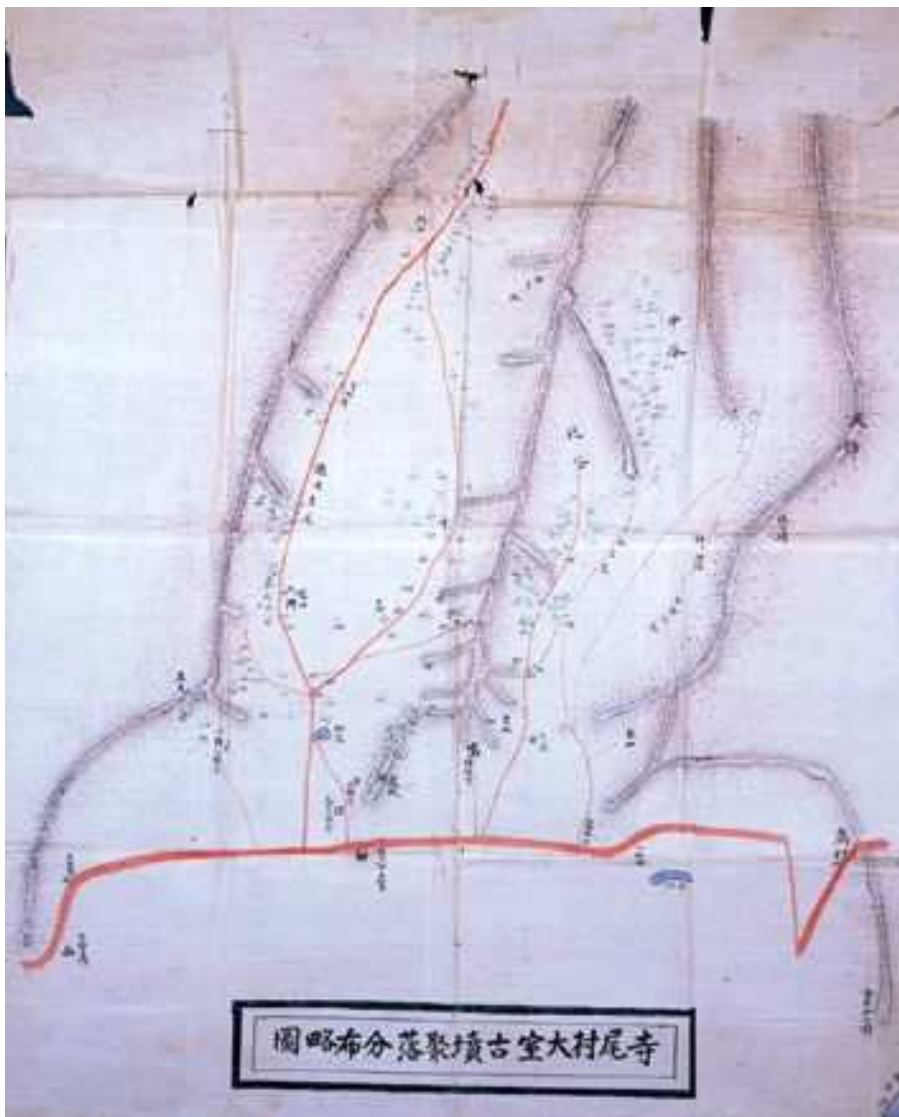
松代町大室では、住民による古墳の調査や保存活動が長く行われてきた。

a 大室史蹟保存会の活動

大正時代初期に大室史蹟保存会が発足し、住民の手で保存活動がはじめられた。大正15年(1926)に大室史蹟保存会が中心となり分布調査を行い、265基の古墳を確認し、『寺尾村大室古墳聚落分布略図』を作成した。

これまで漠然と100有余の古墳があるとされていた大室古墳群に関し、住民の手により具体的な古墳数と分布状況が明らかになった。

しかし、こうした大室史蹟保存会の精力的な活動は、太平洋戦争へ向かう中で停滞を余儀なくされた。



『寺尾村大室古墳聚落分布略図』（大正15年(1926)）

b 調査活動の再開

終戦直後の昭和24年(1949)から、地元の寺尾中学校に在籍した栗林紀道氏を責任者として、本格的な分布調査、台帳作成がはじまった。

第1回の調査は、中学校が夏休み中の昭和24年(1949)8月3日から9日まで行われた。終戦直後の物資が不足する中で、衣服や靴がすぐに擦り切れ、手足から血を流しながらも寺尾中学校の生徒110人が交代で山の中を横一列に並んで古墳を探し回った。

昭和27年(1952)まで毎年続けられたこの調査によって、新たな古墳が次々と発見され、大正時代作成の『寺尾村大室古墳聚落分布略図』で265基であった古墳の総数は、501基となった。全501基について、位置を示した大室古墳群分布図及び、古墳の現状、所在地、所有者、構造等を記載した古墳調査表が作成されて学術的な基礎データが整えられた。現在の古墳の番号は、このときの調査成果を使用している。

昭和26年(1951)に明治大学の後藤守一教授の指導のもと、学生、大室古墳保存会会員、寺尾村男女青年団員、学校職員、村民有志が参加し、本格的な古墳の発掘調査、測量が行われた。



調査に向かう一行(昭和26年(1951))
 前列右端 栗林紀道氏
 前列右から二人目 後藤守一教授
 前列左端 大塚初重助手



大室古墳調査の案内通知
 (昭和26年(1951))

調査の主催や参加者に大室古墳保存会の名が見られ、栗林氏を中心とする分布調査が始まる中で、大室史蹟保存会が戦後の新たな機運の中で再発足したものと見られている。また、この調査の指導を後藤教授に依頼した背景には、教授の夫人が大室出身であることと深い関わりがあり、大室古墳保存会の働きかけがあって成し得たものであった。

調査は、大室谷支群107号墳、北谷支群358号墳の発掘調査等、16基の古墳で行われた。それまでに調査された古墳は、埴科教育会が大正12年(1923)から大正13年(1924)まで行った3基に過ぎなかったが、16基もの古墳の調査により、同時に進む栗林氏を中心とする調査と合わせて大室古墳群に関する新たな知見が、次々と集積された。大室古墳保存会員は、自らの手で保存してきた古墳により地元の歴史が明らかとなっていく過程を目の当たりにし、保存の意識がさらに高まっていった。

古墳調査表(昭和27年(1952))



大室古墳群分布図(昭和27年(1952))

c 古墳監視委員会の発足

昭和30年代以降、全国各地で庭石への転用等を目的とした古墳石室石材の搬出が見られ、大室古墳群も例外でなかった。主に羨道部の石材の引き抜きが頻発し、こうした事態を拡大させないために、昭和40年(1965)に古墳監視委員会が設立された。

監視委員会は、それまでの大室古墳保存会に代わり設置され、大室区長を代表者とする住民組織であった。石材転用による古墳の破壊を目の当たりにしながらも、公の立場から古墳保護を訴える組織がないことへの住民の危機意識が、大室古墳保存会の継続でなく、古墳監視委員会という新たな組織への改編、発足を選択させることになった。地域として古墳の破壊をこれ以上認めない強い姿勢が監視という名称に表れているように、監視委員会の活動は、不必要な破壊を防止する古墳保護に特化していた。

しかしながら、昭和45年(1970)から昭和55年(1980)までにかけて長野市教育委員会が駒澤大学考古学研究室に委託した調査に当たり、以前は大室史蹟^{しせき}保存会や大室古墳保存会であった地域との窓口の役割を古墳監視委員会が担っており、監視委員会は、古墳保護に特化しながらも保存活動の流れを受け継いでいることがうかがえる。

d 大室古墳群保存会の発足

その後、石材転用を目的とした古墳の破壊が見られなくなったことや分布調査が終了したことから、大室古墳群の保護に加えて環境整備や啓発などの保存活動をさらに推進するために、昭和56年(1981)に古墳監視委員会を発展的に解消して大室古墳群保存会が発足した。保存会の会員約120人により、古墳の見回りや清掃活動に加え、勉強会や先進地視察、見学会などの活動が展開されるようになった。発足以来、古墳群での年2回の雑草木の除去や伐採を欠かさずを実施するなど、啓発や保存活動を続けている。

栗林氏とともに調査に参加した方々、また、当時中学生として栗林氏と共に山中を歩き回った方々が歴代の保存会長に名を連ねており、古墳を保存する意識が連綿と受け継がれてきたことがわかる。

e 史跡指定

昭和59年(1984)から平成8年(1996)まで13年間、^{おおむろ}大室古墳群^{おおむろだに}大室谷支群において明治大学考古学研究室が、継続的に学術調査を実施した。調査を指導したのは、昭和26年(1951)の発掘調査に助手として参加していた明治大学の大塚初重教授であった。大塚教授は、昭和26年(1951)の調査成果を基にして検討課題を究明するために大室古墳群を研究フィールドとしていた。

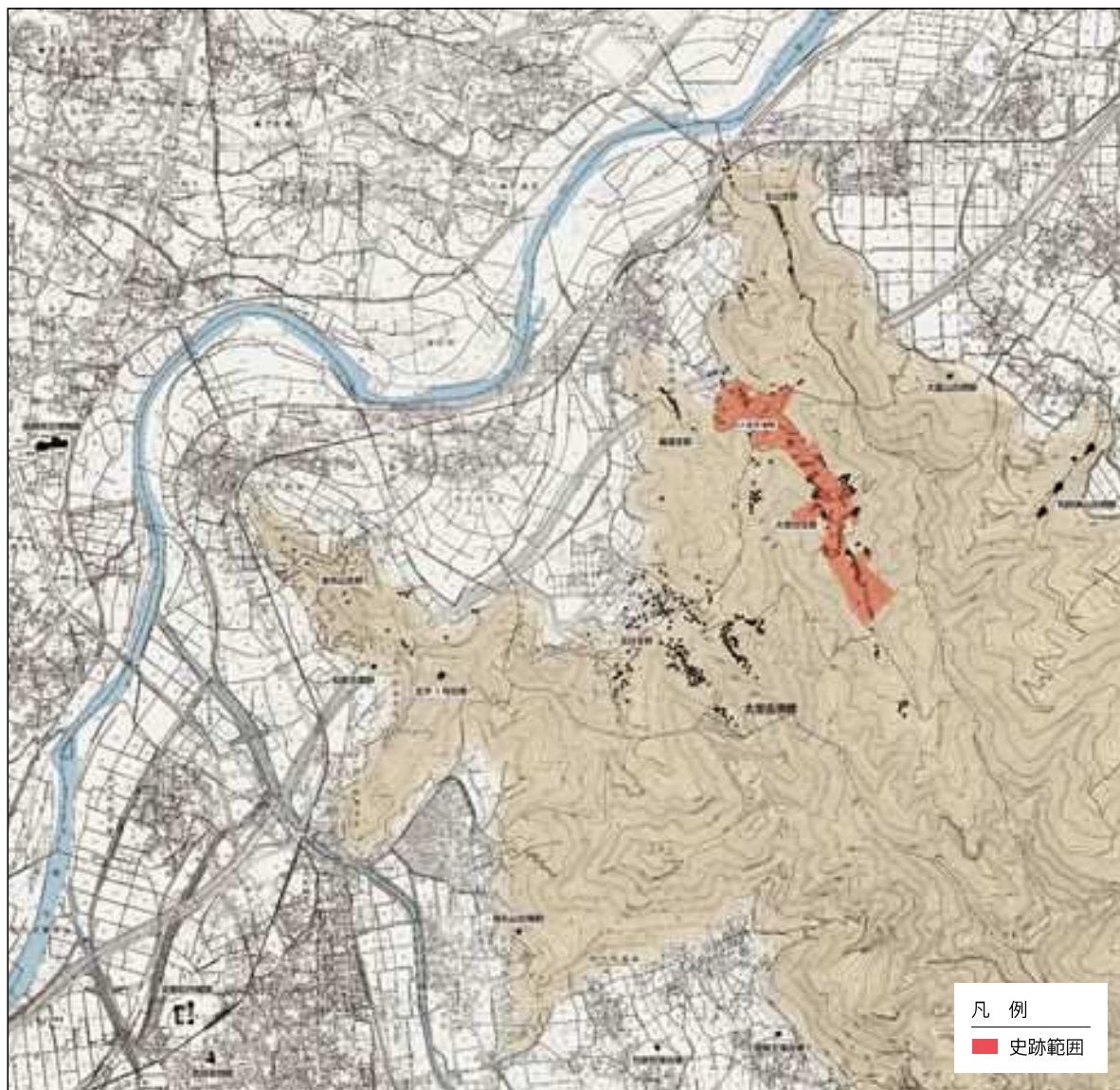
この頃の大室古墳群保存会の主要な会員は、昭和26年(1951)に大塚教授とともに発掘調査に参加した方々であり、調査対象になる古墳の地権者からの同意の取り付けや古墳の草刈り等を担うなど調査を全面的に支援していた。

この調査によって大室古墳群の特徴である^{がっしょうがたせきしつ}合掌形石室や^{つみいしづか}積石塚古墳について、特に古墳群の形成初期に関して不明であった点が次々と明らかになり、大室古墳群の学術的な重要性が高まった。大正期、昭和20年代から続く住民主体の分布調査や保存活動が引き継がれてきた成果が、平成9年(1997)の史跡指定に結び付いた。

		主な出来事
大正	大室史蹟保存会	<ul style="list-style-type: none"> ・大正15年(1926) 『寺尾村大室古墳群聚落分布図』
昭和	大室古墳保存会	<ul style="list-style-type: none"> ・太平洋戦争による活動停滞 ・昭和24年(1949) 寺尾中学校粟林氏による分布調査、台帳作成(昭和27年(1952)まで) ・昭和26年(1951) 明治大学後藤教授による調査 ・昭和27年(1952) 大室古墳群分布図の作成 ・昭和30年代 石室石材の引き抜きが頻発
	古墳監視委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和40年(1965) 古墳監視委員会の発足 ・昭和45年(1970) 駒澤大学による調査(昭和55年(1980)まで)
	大室古墳群保存会	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和56年(1981) 大室古墳群保存会の発足 ・昭和59年(1984) 明治大学の学術調査(平成8年(1996)まで)
	平成	<ul style="list-style-type: none"> ・平成9年(1997) 史跡指定 ・平成10年(1998) 明治大学の発掘調査(平成17年(2005)まで) ・平成14年(2002) ガイダンス施設開館
令和		<ul style="list-style-type: none"> 大室古墳館協力会によるガイダンス施設の管理、運営

古墳の見回り、
清掃など

大室古墳群にかかわる住民活動あゆみ



大室古墳群の分布図

エ まとめ

平成10年(1998)から大室古墳群の史跡整備事業が、指定範囲の16.3ヘクタールを7つのゾーンに分け、まず史跡入口部に当たるエントランスゾーンと施設整備ゾーンから始まった。

施設整備ゾーンでは、平成14年(2002)7月7日に史跡大室古墳群のガイダンス施設の大室古墳館が開館した。施設の管理、運営は、大室古墳群保存会と別に地域住民が設立した大室古墳館協力が担っている。

エントランスゾーンでは、平成10年(1998)から平成17年(2005)までにかけて、明治大学考古学研究室の協力を得ながらゾーン内23基の古墳の発掘調査が行われた。この調査成果に基づき、桑の段々畑の除去や、植林された杉の伐採をし、古墳築造時の地形

と景観を復元する保存修理を実施した。また、エントランスゾーンの整備が進む中、一部の都道府県で絶滅危惧種に指定されており、本市内でもほとんど自生が見られないナベナ(鍋菜)が確認されたため、協力会が、地域にみられる山野草の植栽等を行うようになった。このように古墳を取り巻く環境を保全し、歴史的景観や自然環境を体感できる整備を進めてきており、毎年のように小学校の社会科見学、高校の社会科授業、大学の研究室の遺跡踏査などで児童生徒や学生が大室古墳群を訪れている。

また、大室古墳群保存会や地域住民が中心の実行委員会を組織して大室古墳まつりを開催しており、火おこしや勾玉づくりなどの体験をとおして大室古墳群を次世代へ引き継いでいこうとする活動が行われている。

このように100年に及ぶ大室古墳群の保存活動は、地域住民のアイデンティティを形づくる重要な要素となっている。大室古墳群を保存し、活用していく住民の活動は、地域固有の歴史ある営みとして、今後も維持され、継承されるべき歴史的風致である。



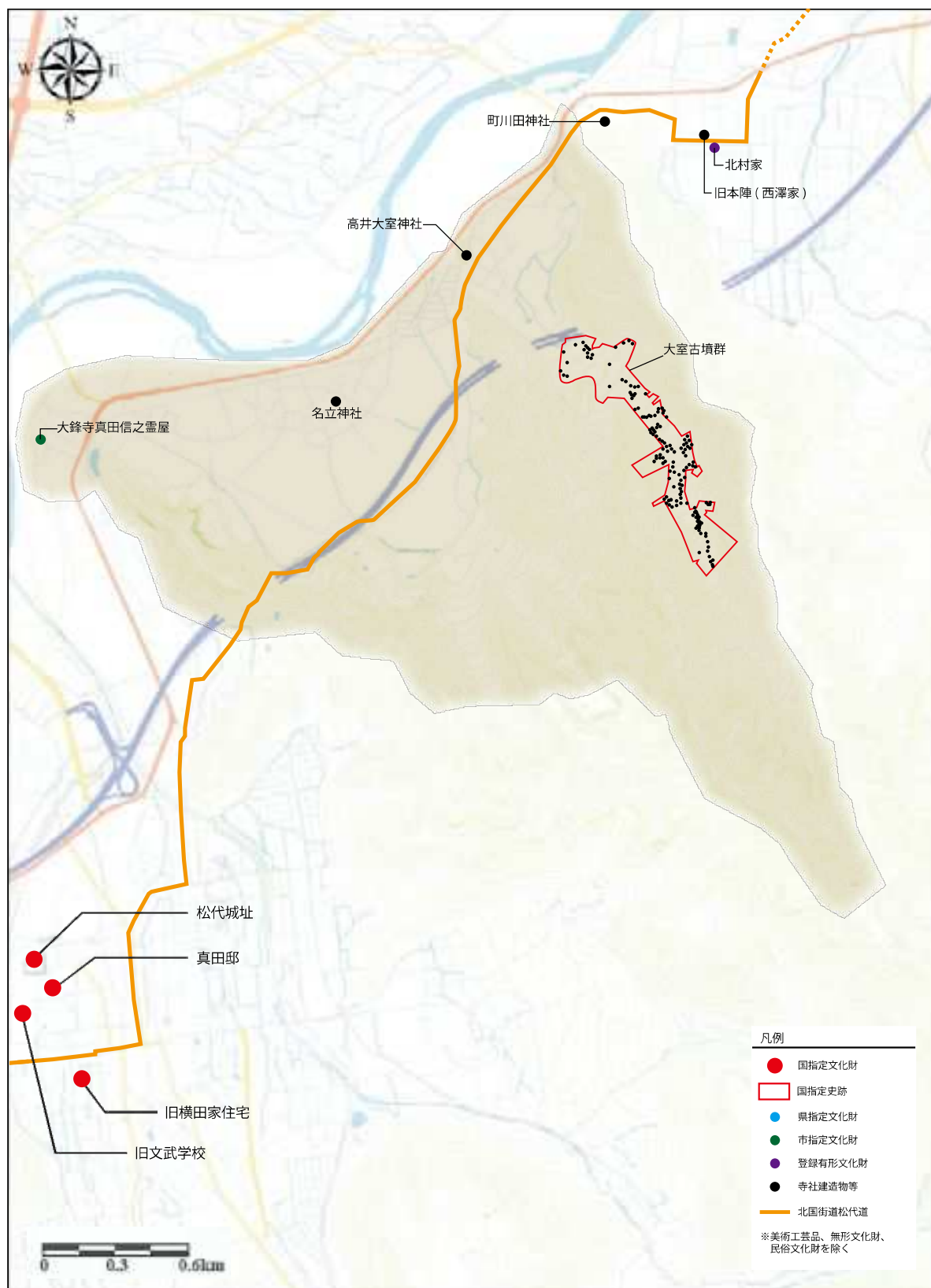
大室古墳館



小学校社会科見学の様子



大室古墳群まつりの様子



大室古墳群にみる歴史的風致の範囲(S=1/25,000)